第 80 回日本英文学会
自由研究発表資料
日時：2008 年 5 月 24 日
場所：広島大学

西原貴之
呉工業高等専門学校
n_takayuki@kure-nct.ac.jp

詩の読解と説明文の読解における辞書使用の違いについての一考察

1. 本発表の目的

大学生日本人英語学習者が英語詩と英語説明文を読んだ際に、その辞書使用がどのように異なるのかを調査すること

２．研究の背景

【先行研究】

- 1980 年代後半から始まった外国語学習者辞書使用様式の研究
- 文学理論や認知心理学での文学作品の意味理解の独自性を指摘してきた研究（例：ロシア・フォルマリスム、関連性理論）

【これまでの研究でなされていないこと】

- 日本人英米文学学習者にとって英語文学読解中に辞書使用は欠かせないものであり、かつ文学作品の意味理解には特徴があるということが述べられているにもかかわらず、外国文学を読む際の学習者の辞書使用の様式を調べた研究は、発表者の知る限りない

【日本人英語学習者の文学作品読解における辞書使用の研究に将来期待される貢献】

1. 日本人英米文学学習者にとってより便利な辞書開発に貢献する情報の提供
2. 日本人英語学習者の英語文学読解プロセスの解明への貢献
3. 優れた日本人英語文学読者を育成するための貢献
4. 外国人英語文学読者を扱う文学理論構築のための貢献

【本調査が扱う範囲】

第一歩として、英語が得意な読者が英語詩を読む場合にどのような目的で辞書を引くのかという点を調査することとした

【詩を選んだ理由】

- 詩は文学テクストの特性（文学性）として議論されてきたものをもっとも凝縮した形で持っており、出発点として適切なのではないかと考えたため
- 調査実施可能性の問題として、テクストが比較的短く、調査しやすいため

３．予備調査

3.1 予備調査の目的

英語のリーディングでどのような目的で辞書を用いるかを調べ、その目的をカテゴリー化すること

3.2 調査参加者

英語を外国語として学び、英語教育学を専攻している日本人大学生及び大学院生英語学習者 22 名

3.3 調査方法

英語のリーディングでどのような時に辞書を引くかをたずねた自由記述の質問紙を各調査参加者に渡し、各自空いている時間に回答し、所定の場所へ提出してもらった

3.4 分析方法

KJ 法（川喜田, 1967, 1970）によりその回答をまとめ、カテゴリーを作成した（付録 1 のカテゴリー参照）。そして、そのカテゴリーをもとに、本調査で用いる質問紙を作成した（付録 2）。

４．本調査

4.1 本調査の目的

本調査の目的は、大学生日本人英語学習者が英語詩と英語説明文を読んだ際に、その辞書使用がどのように異なるのかを調べることである。しかし、テクストのジャンルが異なれば、読みの目的も連関して変化する。そこで本調査では、英語詩テクストを読む際は、作者がそのテクストを通して表現しようとしていた事柄を読み取るというタスクを、英語説明文テクストを読む場合はそのテクストの内容についてまとめるというタスクを課した。そして、それぞれのタスク遂行での辞書使用の様子を調べることとした。

4.2 データ収集方法

・刺激再生インタビュー

4.3 調査参加者

調査参加者は、英語を外国語として学んでいる日本人大学生英語学習者 30 名

【大学生を調査対象者とした理由】

1. 研究の第一歩として児童詩などではなく、普通の詩を調査材料に選んだこと
2. 詩のテクストには有標的な言語表現が含まれており、標準的な英語の学習段階にある中高生を対象者とするのは危険である（文学作品の読解の第 2 言語習得に対する効果（あるいは負の効果）についてはまだ何も明らかになっていない）と判断したこと

4.4 調査手順と調査材料

・下記の手順で各調査参加者に個別に 2 回実施（各試行は別の日に実施）

調査手順	調査材料
1. 簡単な会話とラポール形成	
2. 調査の主旨の説明とビデオ録画許可の承認	
3. 日本語による調査手順の説明。具体的には、(1) 英語詩のテクストか、英語説明文のテクストを一つ読むこと（読む順序は乱数表を用いてランダム化した）、(2) 自分が読んでいる部分を赤ペンで下線を引きながら読むこと、(3) 辞書を引きたいと感じたときはいつでも引いてよく、辞書で引いた言語表現は緑の蛍光ペンで色づけすること、(4) 調査参加者が、与えられた課題（英語詩テクストの場合は作者が表現しようとしていた事柄を、英語説明文テクストの場合はヒドラはどういうモンスターかを説明すること）に解答できると思った時点で、テクストの読解は終了となること、(5) 解答は、テクストを見ずに解答用紙に書くこと、(6) 辞書を使った場合はその理由を解答後にたずねること、(7) タスクの遂行時間に時間制限はないこと、(8) タスク遂行のスピードは関係ないこと、(9) テストではないのでリラックスして取り組んでほしいこと、を伝える。	
4. 一連の作業を確認と練習	
5. ヒドラの絵の提示	・ヒドラの絵
6. テクスト読解タスク実施。調査参加者は、指示文に従ってタスク（英語詩テクストの場合は作者が表現しようとしていた事柄を、英語説明文テクストの場合はヒドラはどういうモンスターかを理解する）を遂行。調査者は、調査参加者のペン先の動きをビデオで録画。	・ 英語詩テクスト（Merwin (1967/2003)（付録 3） ・ 英語説明文テクスト（付録 4） ・ 赤ペン ・ 緑の蛍光ペン ・ 辞書 ・ ビデオ・カメラ
7. 調査参加者は、テクストを見ずに解答用紙に解答	・ 解答用紙
8. 日本語による刺激再生インタビュー。緑の蛍光ペンでマークした言語表現を辞書で調べた理由をたずねる。	・ タスク遂行中の辞書使用についての質問紙（付録 2）
9. 調査参加者はテクスト内の未知語をマーク	・ 黒ペン
10. 調査参加者は質問紙に回答	・ 読解タスクの感想をたずねる質問紙

【テクストの選択】

・ 英語詩テクスト

1. 乱数表を使って合計 50 の現代詩テクストを現代英語詩選集（Ramazani et al. (Eds.). (2003)、Kennedy and Gioia (Eds.). (2002)、Brooks and Warren (Eds.). (1976) をリソースとして用いた）の中からラン

ダム抽出

2. それぞれのテクストについて、(1) 書記素的特徴（詩のレイアウトの様式をとっているか)、(2) テクストのテーマ（テクストのテーマが調査参加者に不快感を与えるものでないかどうか)、(3) テクストの長さ（テクストが数行で終ってしまったり、2 ページ以上にわたっていないか)、(4) テクストに含まれる語彙の頻度レベル（JACET 8000 の v8an.pl というレベル別カバー率分析プログラムを使用し、固有名詞以外の語の 1 語あたりの平均レベルを算出した）を調べる
3. 上記の（1)、(2)、(3) に関して不適切と感じられるものを除外した上で、(4) で 1 語あたりの平均レベルが 2.0 以下のものを残す
4. 残ったテクストに番号を付け、再びランダム抽出した結果、Merwin (1967/2003) を抽出（固有名詞を除いて 128 語からなり、(4) のスコアは 1.23）

・ 英語説明文テクスト

1. 英語詩のテクストのタイトル（The Hydra）をもとに *Encyclopedia Mythica*＜http://www.pantheon.org/＞から抜粋
2. 語彙の頻度レベル（JACET 8000 の v8an.pl というレベル別カバー率分析プログラムを使用し、固有名詞以外の語の 1 語あたりの平均レベルを調整した）を、極力詩のテクストと同じとなるように改作（テクストの長さは 129 語、頻度レベルは 1.46）
3. 改作は発表者と英語教育学を専門とする英語母語話者英語教師 1 名が話し合う形で改作

【テクストの統制】

1. 長さ
2. 語彙レベル（$t(254) = 1.77$、$p = .23$）（表 1 参照）
3. テーマ

表 1．テクストの語彙レベルの分布

	L1	L2	L3	L4	L5	L6	L7	L8	L9	固有	合計
詩	118	2	3	2	0	3	0	0	0	1	129
説明文	103	8	10	1	2	1	4	0	0	4	133

4.6 分析方法

1. 2 つの処遇間で、辞書使用の回数に差があるかどうかを調べるために、一様性の検定（イェーツの補正を用いた上での 2×2χ 二乗検定）を行う（有意水準は 5%)。
2. 英語詩テクストの読解と英語説明文テクストの読解で、各カテゴリーにおいてそれぞれ何回辞書が用いられたかを集計する。それぞれの読解で頻度が大きく異なっているカテゴリーと頻度が似通っているカテゴリーに関して、一様性の検定（イェーツの補正を用いた上での 2×2χ 二乗検定）を行う（有意水準は 5%)。

5．結果と考察

調査参加者の辞書使用の調査結果は付録 1 に示した通りである。

【結果】

1. 調査参加者は 2 つのテクストの読解において、辞書を同程度の回数使用していた（$\chi^2(1) = 0.25$、$p = 0.62$（同時に、1 つの集団の反復測定の平均値の差の検定（t 検定）を行ったところ、$t(29) = 0.97$、$p = .34$ となり、調査参加者の英語詩読解時と英語説明文読解時の辞書使用の回数に有意差は検出

されなかった））

2. 辞書使用をカテゴリー別に見ていくと、調査参加者は英語詩読解と英語説明文読解で辞書を異なった様式で用いていたことが示された
   （1） 英語詩読解の場合は、調査参加者は、カテゴリー4「既知語が知らない意味で使われていると判断し、どのような意味があるのかを調べた」を理由として最も辞書を使っていた（61回）。これは、英語詩読解時の辞書使用回数全体（125 回）の 48.8%に相当する。
   （2） 英語説明文読解の場合は、調査参加者はカテゴリー1「未知語の意味が分からなかった」を理由として最も辞書を使っていた（58 回）。これは、英語説明文読解時の辞書使用回数全体（111 回）の 52.3%を占めている。
   （3） カテゴリー1 と 4 において辞書使用回数に偏りが見られるかどうかを調べるために、一様性の検定を行ったところ、$\chi^2(1) = 69.11$、$p = 0.00$ となり、辞書使用回数の頻度に偏りがあることが示された。
3. カテゴリー7「既知語における既知の意味を確認した」の結果から、調査参加者は、テクスト読解の違いに関係なく同程度に既知語の意味確認を行っていたことを示している（$\chi^2(1) = 0.04$、$p = 0.84$）。

【結果から言えること】

1. 調査参加者は英語詩読解の場合も英語説明文読解の場合も、主に意味理解のために辞書を引いている→Tomaszczyk (1979)や Tono (2001) など、これまでの読解時の辞書使用研究の結果と整合
2. 調査参加者は異なる 2 ジャンルのテクストに対して異なった意味理解を行っていた。英語説明文読解の場合は、未知語の意味を調べるというレベルで辞書使用をやめているのに対し、英語詩読解の場合には、既知語であるにもかかわらずその語に他の意味を見出そうとしている。→Barthes (1964/1967) など、これまでの文学理論での議論と整合
3. 既知語の既知の意味の確認は英語詩読解と英語説明文読解で同程度に行なわれるが、英語詩の読解では既知語に他の意味がないかどうか調べられる
4. 調査参加者の辞書使用目的は非常に限られている→Tono (2001) など、これまでの読解時の辞書使用研究の結果と整合

【本研究の限界】

1. それぞれのテクスト読解時の辞書使用が適切なものかどうか明言できない点
2. 一般化可能性の問題
3. 他ジャンルの文学読解時の辞書使用については調査していない点
4. 英語詩と英語説明文を語の困難度で統制してはいるものの、究極的には学習者にとってのテクスト内の既知語と未知語の割合の統制が欠けているという点。事実、説明文テクストの方が詩のテクストよりも未知語の数が多かったという結果が示されている（$t(29) = -8.38$, $p = .00$）。つまり、英語説明文読解の方が英語詩読解よりもカテゴリー1 の生起数が多かったのは、単に調査参加者の未知語の数が多かったことが理由である可能性がある。

6．結論

本調査は、英米文学読解中の日本人英語学習者の辞書使用を調査した最初の試みであり、具体的に英米文学教育に対して提案を行うことは難しい。また、本調査はケース・スタディーの域を出ない。したがって、この結果を一般化することに対しても慎重にならなければならない。しかし、こういった研究を積み重ねていくことで、日本人英語学習者の英米文学読解中の情報処理プロセスを記述して

いかなければならない。そうすることで、次の段階として、文学読解が得意な読者とそうでない読者の辞書使用を比べ、後者に対して具体的なアドバイスをすることが可能となり、英米文学教育の発展を促すことが可能になると考えられる。

参考文献

Atkins, B. T. S., & Varantola, K. (1998). Monitoring dictionary use. In B. T. S. Atkins (Ed.), *Using dictionaries: Studies of dictionary use by language learners and translators* (pp. 83-122). Tübingen, Germany: Max Niemeyer Verlag.

Barthes, R. (1967). *Elements of semiology* (A. Lavers & C. Smith, Trans.). New York: Hill & Wang. (Original work published 1964)

Battenburg, J. (1991). *English monolingual learners' dictionaries: A user-oriented study*. Tübingen, Germany: Max Niemeyer Verlag.

Bogaards, P. (1998). What type of words do language learners look up? In B. T. S. Atkins (Ed.), *Using dictionaries: Studies of dictionary use by language learners and translators* (pp. 151-157). Tübingen, Germany: Max Niemeyer Verlag.

Brooks, C., & Warren, R. P. (Eds.). (1976). *Understanding poetry* (4th ed.). Boston: Heinle & Heinle.

Christianson, K. (1997). Dictionary use by EFL writers: What really happens? *Journal of Second Language Writing*, *6*, 23-43.

Crowder, M. J., & Hand, D. J. (1990). *Analysis of repeated measures*. London: Chapman & Hall.

Ellis, R. (1997). *Second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.

Ericsson, K., & Simon, H. (1996). *Protocol analysis: Verbal reports as data* (3rd ed.). Cambridge, MA: The MIT Press.

Gass, S. M., & MacKey, A. (2000). *Stimulated recall methodology in second language research*. Mahwah, NJ: Lawrence Earlbaum Associates.

Jakobson, R. (1960). Closing statement: Linguistics and poetics. In T. A. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp. 350-377). Cambridge, MA: The MIT Press.

Kennedy, X. J., & Gioia, D. (Eds.). (2002). *An introduction to poetry* (10th ed.). London: Longman.

Kintsch, W. (1998). *Comprehension: A paradigm for cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Koch, G. G., Landis, J. R., Freeman, J. L., & Freeman, D. H., Jr. (1977). A general methodology for the analysis of experiments with repeated measurement of categorical data. *Biometrics*, *33*, 133-158.

Merwin, W. S. (1967). *The lice*. New York: Atheneum.

Merwin, W. S. (2003). The Hydra. In J. Ramazani, R. Ellmann, & R. O'Clair (Eds.), *The Norton anthology of modern and contemporary poetry, vol. 2: Contemporary poetry* (3rd ed., p. 411). New York: W. W. Norton. (Original work published 1967)

Mukarovsky, J. (1964). Standard language and poetic language. In P. L. Garvin (Ed. & Trans.), *A Prague School reader on aesthetics, literary structure, and style* (pp. 17-30). Washington, DC: Georgetown University Press. (Original work published 1932)

Pilkington, A. (2000). *Poetic effects: A relevance theory perspective*. Amsterdam: John Benjamins.

Ramazani, J., Ellmann, R., & O'Clair, R. (Eds.). (2003). *The Norton anthology of modern and contemporary poetry, vol. 2: Contemporary poetry* (3rd ed.). New York: W. W. Norton.

Schulz, R. A. (1981). Literature and readability: Bridging the gap in foreign language reading. *The Modern Language Journal*, *65*, 43-53.

Shklovsky, V. (1965). Art as technique. In L. T. Lemon & M. J. Reis (Eds. & Trans.), *Russian Formalist*

criticism: Four essays (pp. 3-24). Lincoln, NE: University of Nabraska Press. (Original work published 1917)

Sperber, D., & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and cognition* (2nd ed.). Oxford: Blackwell.

Tomaszczyk, J. (1979). Dictionaries: Users and uses. *Glottodidactica*, *12*, 103-119.

Tono, Y. (2001). *Research on dictionary use in the context of foreign language learning: Focus on reading comprehension*. Tübingen, Germany: Max Niemeyer Verlag.

Zwaan, R. A. (1996). Toward a model of literary comprehension. In B. Britton & A. Graesser (Eds.), *Models of understanding text* (pp. 241-255). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

イェルムスレウ，L.（1959）.『言語理論序説』（林栄一（訳））．研究社.（原著は 1953 年出版）

呉宣児（2004）.「知り合いをインフォーマントにする」. In 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ（編），『質的心理学　創造的に活用するコツ』（pp. 126-131）．新曜社.

岡直樹（1990）.「質的データの検定法」. In 森敏昭・吉田寿夫（編），『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』（pp. 176-216）．北大路書房.

川喜田二郎（1967）.『発想法　創造性開発のために』．中央公論新社.

川喜田二郎（1970）.『続･発想法　KJ 法の展開と応用』．中央公論新社.

後藤容子（2003）.「ノンパラメトリック検定」. In 山上暁・倉智佐一（編），『要説　心理統計法』（pp. 116-139）．北大路書房.

徳永暢三（1987）.「W．S．Merwin の詩－一新されたスタイルについて－」.『大妻女子大学文学部紀要』，19，1-14.

西原貴之（2004）.「文化知識教授の教材に関する一考察－文学テクストと説明文テクストの使用の有機的融合を目指して－」.『中国地区英語教育学会研究紀要』，34，11-20.

西原貴之（2005）.「英語教育における「文学的文学教材」を開発するための理論的考察－等価性の原理、内的逸脱、外的逸脱に焦点を当てて－」.『日本教科教育学会誌』，28 (3)，43-52.

吉田光演（1985）.「テクスト受容の経験的研究のために」.『金沢大学文学部論集文学科篇』，5，45-66.

ロトマン，Yu．M．（1977）.「芸術テキストの構造」（磯谷孝（訳）），Yu．M．ロトマン，『文学理論と構造主義－テキストへの記号論的アプローチ－』（pp. 53-348）．勁草書房.（原著は 1970 年出版）

付録 1　辞書使用理由のカテゴリーと辞書使用調査の結果

番号	カテゴリー	英語詩読解	英語説明文読解	合計
1	未知語の意味が分からなかった	17	58	75
2	未知語の推測した意味が正しいかどうか確認した	3	12	15
3	未知語の意味を 1、2 とは異なる理由で調べた	0	0	0
4	既知語が知らない意味で使われていると判断し、どのような意味があるのかを調べた	61	5	66
5	既知語が隠れた意味で使われていると考え、隠れた意味のヒントを探した	4	0	4
6	既知語の未知の意味を 4、5 とは異なる理由で調べた	2	1	3
7	既知語における既知の意味を確認した	28	26	54
8	既知語における複数の既知の意味のうち、どれが文脈に合っているかを判断した	0	0	0
9	既知語における既知の意味を 7、8 とは異なる理由で調べた	0	4	4
10	未知語の用法を調べた	2	0	2
11	既知語の知らない用法を調べた	3	1	4
12	既知語の知っている用法を確認した	1	0	1
13	既知語に自分の知らない用法があるかどうかを調べた	0	0	0
14	既知語の用法を 11、12、13 とは異なる理由で調べた	0	0	0
15	未知語の発音を調べた	0	0	0
16	既知語の発音を調べた	0	0	0
17	未知語の関連語（同義語や反意語）を調べた	0	0	0
18	既知語の関連語（同義語や反意語）を調べた	0	0	0
19	未知語が熟語として使われているのかどうかを調べた	0	0	0
20	既知語が熟語として使われているのかどうかを調べた	0	0	0
21	未知語を上記以外の理由で調べた	0	0	0
22	既知語を上記以外の理由で調べた	1	0	1
23	上記以外の理由で辞書を調べた	3	4	7
合計		125	111	236

付録 2　タスク遂行中の辞書使用についての質問紙

Q1．あなたが辞書を引いた理由は、次のうちどれですか？

①意味を調べるため　→Q2
②用法（collocation）を調べるため　→Q7
③発音を調べるため　→Q9
④関連語（同義語や反意語）を調べるため　→Q10
⑤熟語かどうか判断するため　→Q11
⑥その他　→Q12

Q2．（Q1 で①と答えた人のみ）辞書で引いた語は、未知語ですか、既知語ですか？

①未知語　→Q3
②既知語　→Q4

Q3．（Q2 で①と答えた人のみ）辞書を引いた理由は次のうちどれですか？

①意味が分からなかったから
②推測した意味が正しいか確認するため
③その他

Q4．（Q2 で②と答えた人のみ）調べた意味は次のうちどれですか？

①未知の意味　→Q5
②既に何らかの形で知っている意味　→Q6

Q5．（Q4 で①と答えた人のみ）辞書を引いた理由は次のうちどれですか？

①知らない意味で使われていると判断したから
②隠れた意味があるかもしれないと考えたから
③その他

Q6．（Q4 で②と答えた人のみ）辞書を引いた理由は次のうちどれですか？

①意味を確認したかったから
②どの意味がよいか迷ったから
③その他

Q7．（Q1 で②と答えた人のみ）辞書で引いた語は、未知語ですか、既知語ですか？

①未知語
②既知語　→Q8

Q8．（Q7 で②と答えた人のみ）辞書を引いた理由は次のうちどれですか？

①知らない用法だったから
②知っている用法だが、確認したかったから
③他の用法を調べるため
④その他

Q9.（Q1 で③と答えた人のみ）辞書で引いた語は、未知語ですか、既知語ですか？
①未知語
②既知語

Q10.（Q1 で④と答えた人のみ）辞書で引いた語は、未知語ですか、既知語ですか？
①未知語
②既知語

Q11.（Q1 で⑤と答えた人のみ）辞書で引いた語は、未知語ですか、既知語ですか？
①未知語
②既知語

Q12.（Q1 で⑥と答えた人のみ）辞書で引いた語は、未知語ですか、既知語ですか？
①未知語 →Q13
②既知語 →Q13

Q13. なぜ辞書を引いたのですか？

付録 3　英語詩テクスト

（各行に付した数字は行番号である。）

The Hydra

No no the dead have no brothers	1
The Hydra calls me but I am used to it	2
It calls me Everybody	3
But I know my name and do not answer	4
The snow stirs in its wrappings	5
Every season comes from a new place	6
Like your voice with its resemblances	7
A long time ago the lightning was practising	8
Something I thought was easy	9
I was young and the dead were in other	10
Ages	11
As the grass had its own language	12
Now I forget where the difference falls	13
One thing about the living sometimes a piece of us	14
Can stop dying for a moment	15
But you the dead	16
But at moments you have just finished speaking	17
Once you go into those names you go on you never	18
Hesitate	19
You go on	20

付録 4　英語説明文テクスト

The Hydra which lived in the swamps near to an ancient Greek city, was a terrifying monster which was said by some to be the offspring of one monster that was half-maiden and half-snake, and another monster with a hundred heads. The Hydra had the body of a large snake and many heads (the generally accepted number is nine), of which one could never be harmed by any weapon, and if any of the other heads were cut off, another would grow in its place. Some say that the terrible smell of the Hydra's breath was enough to kill man or beast. When it emerged from the swamp it would attack herds of cattle and local villagers, eating them with its numerous heads. It totally frightened people for many years.

付録 5　読解タスクの感想をたずねる質問紙

●調査で用いたテクストについておたずねします。あなたはテクストをどの程度難しいと感じましたか？該当する数字を 1 つ丸で囲んでください。

1. **簡単だった**
2. **かなり簡単だった**
3. **どちらかというと簡単だった**
4. **どちらかというと難しかった**
5. **かなり難しかった**
6. **難しかった**

●あなたはテクストをどの程度理解できましたか？該当する数字を 1 つ丸で囲んでください。

1. **理解できなかった**
2. **ほとんど理解できなかった**
3. **どちらかというと理解できなかった**
4. **どちらかというと理解できた**
5. **まあまあ理解できた**
6. **理解できた**

付録 6. 読解タスクの感想をたずねる質問紙の結果

2 つの情報処理間でのテクストの主観的困難度の平均値の差の検定結果

	文学的読解		説明文的読解		*t* (29)	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	*p*
テクストの主観的困難度	4.90	1.11	2.37	0.81	10.00	.00

2 つの情報処理間でのテクストの理解度の平均値の差の検定結果

	文学的読解		説明文的読解		*t* (29)	
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	*p*
テクストの理解度	2.60	1.25	5.23	0.73	-10.67	.00